

御匂唐櫃

一荷

天皇 御裝束唐櫃

御吳服唐櫃

十荷

右各唐織縫御紋之覆掛之

綺羅をみがける御道具、目をおどろかす計也、此持人數千人、あさぎ染の素袍を著す、執事の陪臣是を奉行す、其外の財物雜具、下つかたの女房前後の日にさし遣されて、穩便の御沙汰と云々、かくてより月卿雲客諸司格勤の輩、其程々に供奉のさうぞくを刷ひ、巳の時ばかりに二條の御所へ御むかひにぞ參られける、各殿中へ入給ひ、しばしが程ながら位次に隨ひ座につき給ひ、あるじまうけをとりくゝに、盃のめぐりも過ければ、時もやうく至りぬと行啓をす、め奉る、かすかすの御いはひ、とりわきよろづの作法をはらひの輪とて、へんばいをふませらる、事までおこなはれ、出御も氣色たちぬれば、日亭午におよび、供奉の行列次第にまかせて、われもくゝと出立給ふ、○中略 行列の次第をみださず、前後を圍めぐらし奉り、花軒香車をとろろかし、巍々蕩々として綺羅天にかゝやき、威勢地をうごかすよそはひ、見物の貴賤渴仰の頭を傾け、感情の聲をのめり、かくて大内に入らせ給ふより、扈從の面々そのさまくゝに潜り、新造の御所へ御車をめぐらさる、武家の隨身は唐どの御門の左右をわけて床机につらなり、御壺の召次は中門の間の白洲に蹲踞す、御車よせまで廣橋前内府三條の亞相出むかはれ、帷幄をひきはへ御車を入奉る、御供の車はつぎくゝに軒の外よりおり給ふ、おのくゝ五つぎぬに緋のはかまを著し、かんざしをかうぶり、つま紅のあふぎをかざし、青女房に裙裳をひかせてぞ入られける、關白殿近衛殿一條殿をはじめ奉り、公卿の人々中門のみぎりに揖してひかへ給ふ、諸司御隨身のやからに至るまで其まじりへに伺公す、俗倫はおこたらず千秋の樂を奏し、其側に候せり、御車おさまりてより、内府亞相庭上へおり、三公へ式對ありてともに殿中へ入給へば、參勤の人々みな退き出侍りぬ、内